

終章 近代地域史研究の課題

本書は全体を通じて近代の石川県地域を対象とした研究をおこなったが、各章では様々の単位の地域・地域社会を析出した。そしてそこにおける歴史的具体的問題を解明せんとしたわけであるが、さしあたり第1章以下で対象となった諸地域を抜き書きすると次のようなものとなる。

第1章では「工場」生産の状況を、主に各郡別および金沢市という行政地域単位で考察した。「工場」生産の展開を類型化する際には、金沢周辺地域とか江沼・能美両郡といった行政区域をこえたところの広い範囲で把握する作業もおこなった。これは資本主義化の進展にともなって「工場」生産の形態が変化し、それによって地域的再編が進行した結果であると理解することができる。

第2章では農業生産と石川県地主の特徴を検討したが、加賀・能登の両地域の相違に注目した。とくに1920年代迄は両地域の差は明瞭であった。そのため石川県全体の数値は加賀・能登のこととなった数値の平均値となって表われ、場合によってはその平均値は実態と遊離したものを示しかねないことも指摘した。また地主制を検討する際、せいぜい加賀・能登程度の区分にとどめ、それ以下の小区分の分析には疑問を持った。さらに1920年代以降は農業生産・地主制に関して地域的特徴は残しつつも、県全体としては地域差が解消する方向にあることを予測した。

第3章は日露戦争に対して石川県民がどのようにかかわったかを課題とし、又多大な犠牲のかわりに何をもたらしただのかを求めた。したがって石川県地域全体を検討の対象としたことになる。戦争に際しては市・町・村という行政区域・機関が徴兵単位となり、その業務を担当することから、否応なくそれが意味をもってくる。同県人、同郷人で軍隊が編成され、そのことが競争と協調を煽りたてる。戦争は実像を反映しているか否かは別として、県民性といったものを喧伝する契機ともなった。旧加賀藩地域ではなく、石川県としての独自の性格が強調されるようになったのは、日露戦争以後のことで

はなかろうかと考えている。

第4章は金沢市を対象とした。そこでは金沢市という都市域に3つの側面から接近した。まず全国・北陸・石川県における金沢の位置、あるいはその都市の性格を比較論によって定義し、それをもとに地域の特徴を把握しようとした。次に金沢市を歴史的に考察し、都市としての展開とともにその伝統性という点から金沢市の性格を論じた。第3に金沢市の伝統工業の中から箔工業を選びだして歴史的に分析し、箔工業地域の特有な存在形態を明らかにしようとした。その際箔工業地域のひとつを旧加賀藩時代から歴史的にみた場合、相對請地—大衆免地域という地方下層社会に共通した性格の伝統性があることを指摘した。

第5章は石川県の米騒動が都市型、漁港の米移出反対型、農村型の3つの地域類型のもとに発生したことを分析した。さらに金沢市の米騒動を詳細に検討したが、その騒動が地方下層社会の性格を有する地域の民衆を主体としていたことを明らかにした。したがって騒動の展開にもそうした性格が反映していたわけである。直接は行政区画単位でないが、聯区等の地域的なまとまりが民衆の日常生活レベルでは重要な意味を有することも析出した。

第6章では尾小屋鉱山という特殊な地域を取り上げた。鉱山経営やその稼行状況の分析に限定すればそれは地域分析とはいいかねるが、労働争議を媒介として労働者の存在形態まで立ち入ると、そこにおける地域的特質が浮びあがってくる。しかし鉱業生産の数字からみた位置は無視しえないとしても、鉱山地域は石川県地域全体の性格を規定するものではない。場所が離れていたこともあり、やはり尾小屋は特殊な地域であった。

補論は北陸地方という石川県より広い範囲を取り扱っている。横山源之助の目を通しての北陸地域論を検討したのであるが、とくに第4・5章でとりあげた地方都市の下層社会との関連で、補強する意味で収録した。前述したようにごく狭い地域で行政単位とはことなっているが、しかし下層民衆の日常生活には不可欠な地域的まとまりを重視したつもりである。

以上のように本章は様々の単位の地域を取り出し分析してきたわけであるが、それらを近代地域史研究の課題という観点から整理をし、まとめにかえることにしよう。

対象となった地域は大きくみるならば行政単位を基礎としたものと、それとはことなつた広がりをもつた地域とに分類することができる。石川県、河北郡、金沢市、穴水町、堀松村等々は前者に属する。能登地域、金沢市周辺部、第7聯区地域、大衆免地域等々は後者に該当する。行政区域は人為的、政策的なものであるが、本来は「生産単位あるいは経済的基礎空間（商品市場、交通圏など）を土台として、社会的文化的政治的歴史的空間として、行政単位がつくられた」。しかし資本主義の発展と地域への浸透は行政区域の矛盾・再編をもたらした。これは宮本憲一の見解であるが、それをもう少し追うと、次のような内容となる。「資本主義の発展は、地域空間の自立性、相対的完結性を喪失させてしまった。とりわけ、独占段階にはいると、大都市に地方が従属してしまい、地方都市はもとより、封鎖的な農村ですら、自己完結的でなくなった。経済圏と行政圏は一体化する傾向があるが、資本主義の下では経済圏は各企業の行動によって、無計画につくられていくので、たえず両者が分離する。市町村合併や道州制などはこの分離してしまつた地域をもう一度一致させようという上からの再編成である」⁽¹⁾。とするならば資本主義化の中で、行政区域の枠をこえて成立してくる地域的なまとまり、そこにいたる歴史的過程、何故そのようなあらたな地域集団が生ずるのかの考察は近代地域史研究のひとつの重要な課題であると考ええる。

ところで地域経済の立場からの地域研究の第1人者である宮本は先程の見解に続いて、地域論（資本主義と地域に関する）の体系の構想を次のように整理している⁽²⁾。

1 地域経済

A 資本主義一般あるいは商品社会と地域経済

- イ 地域的生産力、ロ 地域的生産と循環、ハ 地域的余剰、
- ニ 社会的分業の地域配置、ホ 交通、ヘ 都市形成、ト 農村の変貌

B 資本主義の発展と地域経済

産業資本主義と都市化・農村「近代化」、独占資本主義と大都市化、
国家独占資本主義の中央集権と地域経済、

2 地域問題

A 都市問題, B 農村問題, C 国土問題,

3 地域政策

A 地方財政, B 地方行政, C 地方自治, D 地域開発,

資本主義との関連での地域研究のひとつの大きな体系が示されているが、宮本自身が評するようにこの構想は「経済と政治（政策）の間に地域問題を挿入した」点で従来の地域論の水準を超えたものとなっている。それは「地域経済の発展が地域社会にどのような変化をあたえるのか。とりわけ住民生活にどのような困難を生みだすのか」⁽³⁾ というテーマの「学際的研究の分野」であることも強調している。宮本の構想と主張するところは、いずれも近代地域史研究の主要なポイントであることはまちがいない。石川県の状況を念頭に置いてあえて付言するとすれば、次の点を取り出しておきたい。資本主義の先進地帯でもなく工業地帯でもない地域が資本主義の波にさらされた場合、地域分業と地域内分業化の問題は最重要課題のひとつとなるのではなからうか。上からの資本主義化のなかで必ずしも自主的自立的でない地域経済の展開過程を、資本主義の運動法則との関連で具体的に明らかにする必要がある。換言するとそれは在来的な特産品生産、守旧的な生産形態の再編・崩壊過程を問題にすることになる。この点は農村部を圧倒的な割合で抱えた地域の研究にとって不可避的な課題であるといえよう。これが第2の課題で本書は不十分ながら検討したが、経済史の立場から今後も研究を積み重ねる必要がある。

近代においてもある地域的なまとまりが政策的・歴史的に形成されていく場合に伝統だとか文化・思想といったものが利用され、あるいは県民性といった必ずしも実態が明確でないものがてことされていくことを認識する必要がある。このような問題を本書において考察する際に、筆者は一定の学問的影響を受けた和歌森太郎の見解を断片的に思い浮かべていた。それをある程度整理すると次のような諸点となる。

和歌森は地方史・郷土史研究の方法について数多くの発言をしているが、まず地方史研究に関しては「地方史の『地方』とは、『地域社会』のことであるとの認識を前提に据える意味である。日本の社会の単位としての『地域社会』の問題にそくして、歴史を検討していくのが『地方』史だと解すべき

ではなからうか。歴史の単位となってきた地域社会は、生命をもった有機体である」⁽⁴⁾と述べている。その研究意義を次のように言う。「それが如何にして形成され、如何に支配権力に翻弄されつつ苦悩したり、保全のためにたたかったりしたか、またその構成住民がよりよい人生を求めて、生活を文化的にひきあげる努力をし、その世界を拡充させようとしてきたか。あるいはそうした拡充発展を願ったことが、かえって地域社会の単位を崩して新たなそれを編成せざるを得なくさせたか。そのような歴史の開展に伴う矛盾の面をも明らかにしていくところに『地方史』があるのだと思う」。この地域社会という言葉は「regional,あるいはlocal communityの翻訳語である」と解説を付している。そして「それは、山・川・谷、また海岸線とか道路など地理的条件で限られる土地を、日々の生産や寝食など生活の場とすることで、方言とか、信仰とかの民俗上でも共通な性質を帯びた社会である」⁽⁵⁾と説明を加えている。

また郷土史との関係については郷土史は「具体的に、町に住み、村にくらす住民が、それぞれの郷土と観念する地域の歴史を、郷土愛に促されつつとらえる傾向を帯びていた」が「そこには、郷土自慢をするかのように、自分たち郷土の歴史の古さや、中央の偉人や権力者たちとのつながりの濃かったことなどを調べたり、書きたてたりするふうが濃」⁽⁶⁾いと批判する。そして郷土史は「地方史」の「称呼の前身であった」⁽⁷⁾。しかし「地域社会としての郷土に固有な問題を設定して、その歴史を探究する態度には」⁽⁸⁾意味があるのではないかと自問し、「真の郷土史は、郷土人が残して来ている史料によって構成されねばならぬ」⁽⁹⁾と自答しているのである。和歌森の言う史料とは民俗学の拠ってた史料のことで、庶民の生活資料であり、種々の民間伝承であり、無意識的に慣習的にくりかえしておこなわれて来たこと等々を指している。

和歌森の見解の中で筆者が大切だと考えるのは、上記のような地域社会に対する姿勢を前提としつつ、資本主義化・近代化の中でそれがどのような歴史として存在したかを具体的に把握すべきであると主張した点にある。いくつか例示すると次のとおりである。「民俗学の立場から明治史をみれば、資本主義の発達からんで、同族団だとか、本家・分家結合とかいわれるもの

が急速に崩壊し、いわば家世帯が個々に社会に放り出された時代である」⁽¹⁰⁾と和歌森は主張するのである。さらに「同族団といい、地域的隣保結合といい、もともとそれが生産上の共同単位として、内包する家々に同質性があったればこそ、存続し得たものである」⁽¹¹⁾、「近代化するということは、家、世帯の孤独なあり方を強いられることであったのである。このような状況が、同族神の祭りとか、同族ないし親族の年中行事的共同集会の機会を、どんどん減らさせることにもなった」⁽¹²⁾。そして「私たちは伝承的な生活面、あるいは非近代的生活方式や態度を求め歩くものであるが、その場合、資料として獲得されるものは、多くは日本の近代化過程の中にあって、その動きを制約した事象である。すなわち前近代的要素である」⁽¹³⁾とも言う。

本書の中で伝統ということにすこしこだわってきたのは、こうした和歌森の考え方を自分なりに咀嚼したからである。資本主義化するなかで再編されてはいるが形骸化しつつ生き残っているもの、民衆生活レベルで受け継がれているもの、意図的に残こされたもの、政策的に消されたもの、したがって積極的に掘りおこし伝え続けるべきものに注目しなければならない。これらの物々を資本主義との関連で地域社会の中に探究していくことを、近代地域史研究の第3の課題だと考え、その実証をおこなった。

- 1) 以上は、宮本憲一「地域論の構成と方法」(自治体問題研究所編『地域と自治体—第2集—』,自治体研究社,1975年)16頁。
- 2) 同前,17~18頁。なお()書きの部分は省略した。
- 3) 以上は、同前,19頁。
- 4) 和歌森太郎「歴史研究と民俗学」(『和歌森太郎著作集』10,弘文堂,1981年所収)328~329頁。
- 5) 以上は、同前,329頁。
- 6)・8) 同前,328頁。
- 7) 同前,325頁。
- 9) 和歌森太郎「日本史研究の諸相」(前掲『和歌森太郎著作集』11所収)500頁。
- 10) 前掲『和歌森太郎著作集』10,312頁。
- 11) 同前,313頁。
- 12) 前掲『和歌森太郎著作集』11,335頁。
- 13) 前掲『和歌森太郎著作集』10,312頁。